

•モノグラフ  
**小学生ナウ**

小学校生徒 ヒーロー

vol.5-1



## 目次

調査レポート	ヒーロー	上杉 賢士	2
深谷 和子			
要 約			2
1. 尊敬する人			4
● 尊敬する人はだれか			5
● 生き方への影響			8
2. ファン行動の実際			10
● スーパーヒーローはだれか			10
● 好きなタレントとファン行動			12
● 好きなスポーツ選手とファン行動			17
3. ヒーローの意味			21
● スターになった理由			21
● スターとの距離			23
● 「あこがれる」層の分析			26
まとめに代えて			30
シリーズ／講座・子ども調査入門 ⑬			
性差のとらえ方		深谷 昌志	31
資料1 調査票見本			35
資料2 学年・性別集計表			42

# 調査レポート／ヒーロー

千葉市立園生小学校教諭 上杉 賢士  
東京学芸大学助教授 深谷 和子

## 要約

### ①

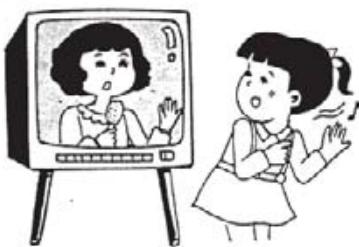
### 尊敬する人は 身近にいる

男女とも、もっとも尊敬する人は「父親」で、約3割。ついで、男子では「スポーツ選手」「伝記上の人々」「母親」の順となり、女子では圧倒的に「母親」である(図1)。



### ②

### 自分の生き方への 影響



「尊敬する人のような生き方」を自分もしてみたいかという問い合わせに対して「ぜひそうしたい」とこたえた子どもは、4分の1程度しかいない(図4)。

### ③

### 好きなタレント

チェックカーズ(17.3%)、中森明菜(15.4%)が群を抜いているが、ファンになったといつても、せいぜいテレビで見るぐらいで、それほど熱狂的であるというわけではない(表4、図7)。



## 4

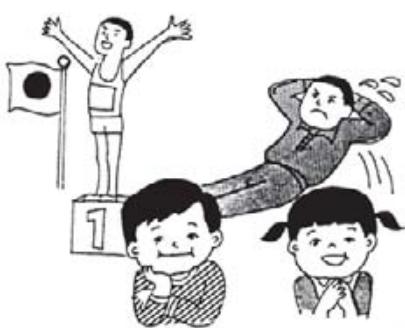
### 好きなスポーツ選手

カール・ルイス(14.7%)に集中し、他はプロ野球のしかも巨人の選手が、上位にあげられる。好きな理由としては、男女とも「実力」を評価するが、女子には「努力」や「やさしさ」など、人柄についても目を向ける傾向がある(表5、図9)。



## 5

### スターになった理由

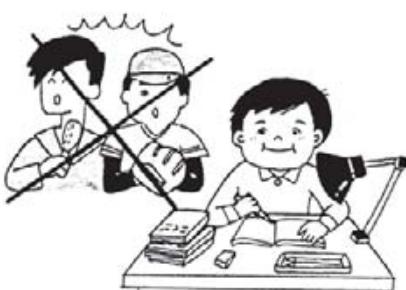


男子では「運」、女子では「才能」や「努力」が評価される傾向にあり、タレントのもつ人気についても、冷静な分析の目が感じられる(図13)。

## 6

### 子どもの中のヒーロー

たとえ好きなスターがいても、とくに自分がなりたいとは思わないし、その人気も一時的なものであろうと考える。現代の子どもたちの心の中に、ヒーローを探す努力は、どうやら無意味だったようと思われる。



#### サンプル数 (人)

学年／性	男 子	女 子	計
4 年	294	281	575
5 年	350	293	643
6 年	307	305	612
計	951	879	1,830

#### 調査概要

対象●東京・千葉の小学4・5・6年生

時期●昭和59年9月～10月

方法●学校通しによる質問紙調査

# 1. 尊敬する人



いつの時代も、子どもたちの中には、ヒーローが住んでいた。それは、野口英世でありリンカーンであり、ナイチンゲールでありキュリー夫人であり、または大将であり元帥であった。多くの場合、それは歴史上の人物か、またはその時代に生きている人びとではあっても、子どもたちからは高く遠く離れた場所にいて、子どもたちがその目で見、ふれ合うことのできる対象ではなかった。だからこそ逆に子どもたちは、あらゆる想像の力を借りながら、時代のヒーローを、自分の胸の中にしっかりと住まわせておくことができたのであろう。そしてそのヒーローたちは、成長発達や人格形成途上の子どもたちにとって、自己形成に目標を与える存在ともなっていた。

しかし、昭和28年にわが国でテレビの放映が開始されてから、子どもの心の中のヒーローたちには、微妙な変化があらわれはじめた。昭和30年初頭、テレビが電気屋さんの店先で黒山の人だかりを集めたころには、リング狹しと雄姿を誇った力道山が、そして子どもたちの間でテレビ視聴の過熱状況があらわれはじめた昭和50年ごろには、ピンクレディーが

子どもたちの心をとらえている。

すなわち、遠く離れてひそかに憧憬を抱くビッグな存在、自分の将来の目標になるビッグな存在というより、実際にその姿を見、声を聞き、ふれ合える（と子どもたちには感じられる）親しみやすい身近なアイドルというかたちへの変化である。

しかし、当時のアイドルたちは、力道山にしろピンクレディーにしろ、またウルトラマンや仮面ライダー、数かずの怪獣などの、創られたキャラクターにしろ、それはまだかなり十分にビッグな存在であった。しかし、それらのアイドルたちは、時代の流れとともに急速に姿を消してゆき、現代は、かつてのスーパーヒーローやビッグなアイドルに代わって、かつてのヒーローやアイドルがもっていたトータルな人物像をこま切れにして、部分的でちいさな要素だけを備えた、いわば「ちいさなヒーロー、ちいさなアイドル」が出現しているように思われる。

本レポートは、そうした時代の流れの中で、もう一度、現代の子どもたちの心の中を探り、ひょっとしたらいるかもしれないヒーローの姿を明らかにしてみようとするものである。

## 尊敬する人はだれか

ヒーローとはいっていい何か。それはたぶん、時代を越え、地域や社会を越えて人びとの間で尊敬され憧憬されるビッグな存在にちがいない。そして子どもの中のヒーローとは、その存在が、多くの子どもの間で、同一の対象としての役割を果たしていると思われる。

同一化の対象については、これまで多くの心理学的研究が行われ、そのテーマは、「尊敬される対象と、愛される対象の、いずれが子どもに影響を及ぼすか」であることが多かった。ヒーローやアイドルについて人びとが語るとき、多分に、前者に「尊敬」の要素を、後者に「愛」の要素をより多く含んだ意味あいでとらえているのではないかと思われる。

そこで、まずここでは、ヒーローを「尊敬」の対象としての側面から追いかけてみよう。すなわちストレートに、子どもたちに「今、いちばん尊敬する人はだれですか」というかたちで聞くことにした(図1)。

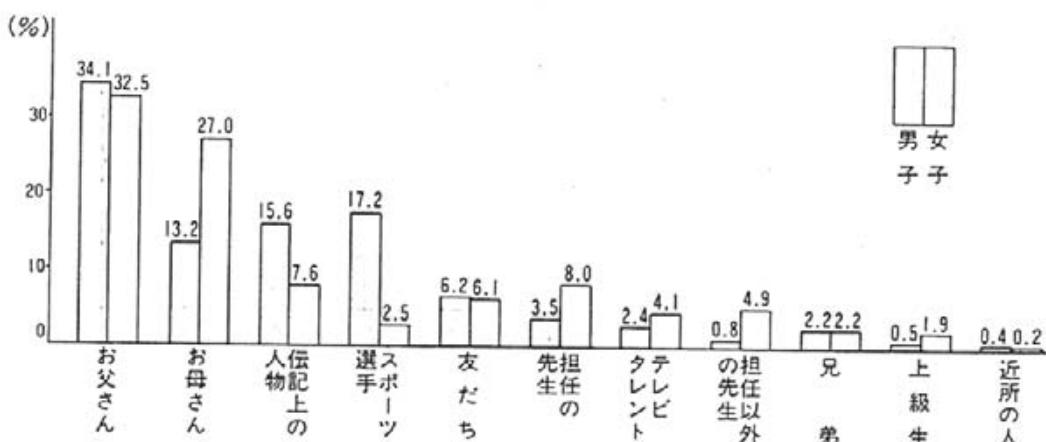
図の中でまず目につくのは、「両親」の存在である。男子の34%が父親、13%が母親を、また女子の33%が父親、27%が母親を「いちばん尊敬する人」としてあげ、合わせると、

両親をもっとも尊敬する子どもは男子の47%、女子の60%にものぼる。むろん、子どもにとつていちばん身近な存在である両親が尊敬の対象としてあげられるのは、わるいことではないかもしれない。かつての時代でも、かなりこうした反応はあったにちがいない。

しかし、これだけマスコミュニケーションが発達し、子どもたちが広く開かれた世界に目を向けているかに思われる時代でも、なつかつ子どもたちが、「両親」を第一に尊敬する対象としてあげているのには、多少のひっかかりを感じないでもない。とくに、女子にその傾向が強い。

また両親以外でも、「友だち、担任の先生やその他の先生、きょうだい、上級生、近所の人」など、子どもの身近にいる人びとを合わせると、かなりの割合を占めてしまう。「伝記上の人物、スポーツ選手、テレビタレント」など、子どもの生活圏の中にいない人びとは、男子で合わせて35%、女子で14%しかいない。ここでもとくに女子にとっての、ビッグな目標、大きな同一化の対象といったものが少ないことに、懸念してしまう。

図1・尊敬する人物



そこで、図2では、両親に「担任の先生」を加えた身近な3人について、あらためて尊敬の度合いを、学年を追って調べてみることにした。

両親や担任の先生への尊敬の気持ちが薄ら

していくことが、かならずしも子どもたちの視野の拡大と同義であるとはいえないであろうが、図が示すように、女子よりも男子に、しかも学年が上がるにつれて「尊敬」が減つてゆく傾向をみると、両親から他の人物へと

図2・身近な人びとの尊敬度

		(%)			
		尊敬していない	ふつう	わりと尊敬している	とても尊敬している
お父さん					
男 子	5.2	19.5	25.4		49.9
女 子	4.2	17.1	25.0		53.7
4 年	4.8	16.5	22.4		56.3
5 年	4.9	17.6	26.9		50.6
6 年	4.4	20.8	26.2		48.6

		(%)			
		尊敬していない	ふつう	わりと尊敬している	とても尊敬している
お母さん					
男 子	6.3	21.0	28.6		44.1
女 子	2.8	13.4	26.9		56.9
4 年	3.9	14.7	26.8		54.6
5 年	4.6	17.8	27.9		49.7
6 年	5.2	19.4	28.5		46.9

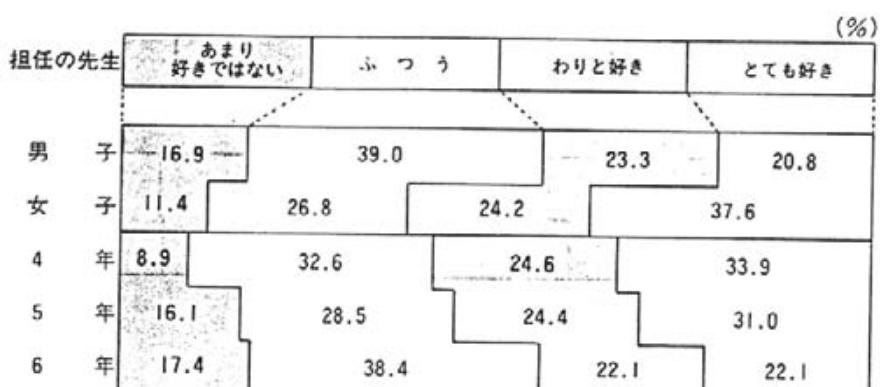
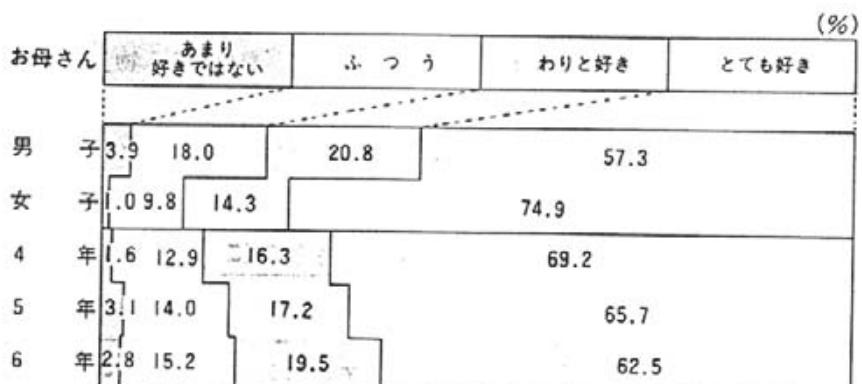
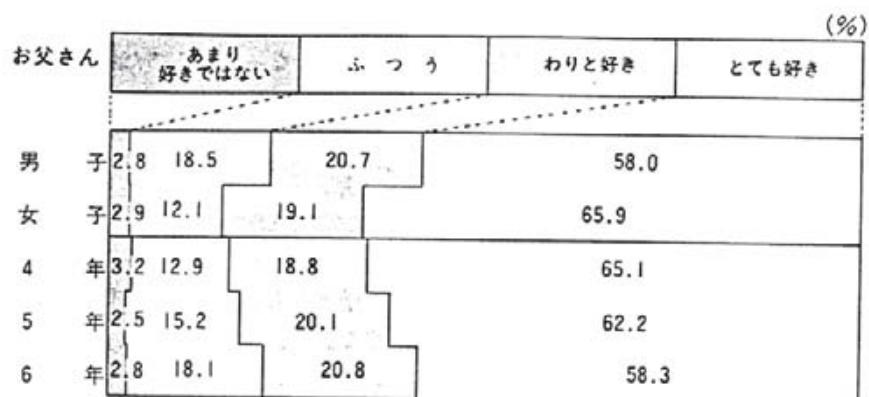
		(%)			
		尊敬していない	ふつう	わりと尊敬している	とても尊敬している
担任の先生					
男 子	16.7	31.0	27.2		25.1
女 子	10.0	27.0	27.9		35.1
4 年	7.8	26.7	29.5		36.0
5 年	15.9	27.6	24.9		31.6
6 年	16.2	32.9	28.4		22.5

尊敬の対象を変えていくことが、子どもたちの基本的な発達のプロセスであるように思われる。

念のために、同一の3人についての「好き嫌い」をたずねた結果を図3に掲げた。グラ

フは、尊敬度を示した図2とほぼ同様な形を示していて、子どもたちの中で、「尊敬」と「好き」がほぼ同義に用いられていることが認められる。しかしそれでも、よくみると、両親については「尊敬」と「好き」の間に多

図3・身近な人びとの好き嫌い



少のくいちがいが見いだされるのがおもしろい。たとえば、

〈父親について〉

とても好き(とても尊敬) 差

男子	58.0% (49.9%)	8.1%
女子	65.9% (53.7%)	12.2%

〈母親について〉

とても好き(とても尊敬) 差

男子	57.3% (44.1%)	13.2%
女子	74.9% (56.9%)	18.0%

となっており、父親より母親に、その差が大きくなっている。とくに女子は母親に「好きだが尊敬はできない」とする子どもが多いこともわかる。

さてつぎに問題になるのは「尊敬」という感情もしくは態度の意味する内容である。「尊敬」が、単なる好き、もしくは好意的な感情の域を越えて「その人のようになりたい」「その人のように生きたい」とする態度をも含んだ概念となっているのだろうか。

## 生き方への影響

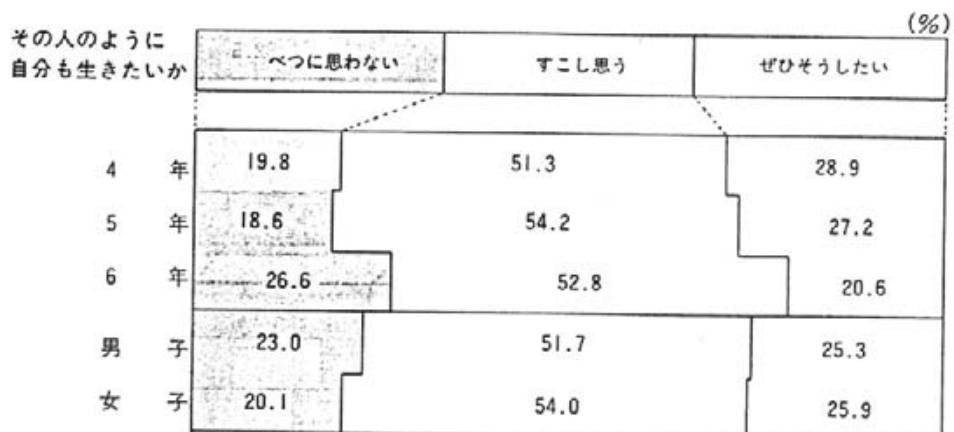
そうした意味で、図4の結果を見てみよう。これは「ではあなたは、その人の生き方をまねしたいと思っていますか（その人が生きたように、これから先ずっと生きてゆきたいと思いますか）」とたずねたものである。

図が示すように、「その人のようにせひなりたい」と積極的な姿勢を示す子どもは、ほぼ4分の1でしかない。そして、「尊敬はするけれども、自分の生き方とは別だ」と考え

る子どもも、それとほぼ同率になっている。すなわち、「尊敬する人」ではあっても、その対象から大きく生き方に影響を与えられるわけではない、というのが現代の子どもたちの姿といえそうだ。しかし、自分の生き方に大きく影響を与えるような人物でない対象にはたして「尊敬する人物」という語を使用していいのかどうか。疑問に思えてくる。

昔の野口英世やリンカーンやナイチンゲー

図4・尊敬する人の生き方に



ルは、調査データは残っていないが、おそらく、子どもの将来に目標たりうる人物であったのではなかろうか。

また、こうしたヒーローに代わってアイドルが登場してきた時代においても、少年がかかる野球帽といえば、そのほとんどが「YG」マーク入りのものであったし、10年ほど前、ピンクレディーがブラウン管を席巻したころにも、教室や街角に、そのしぐさをまねる少

女たちがあふれたものである。彼らは、「生き方をまねる」というほどではないにしても、同じ帽子をかぶり、しぐさをまねることで、ヒーローに一步でも近づこうとしていたのではあるまいか。こうした時代の少年、少女たちに比べれば、現在の子どもたちは、なんとも「醒めた」存在であり、また別の言い方をするならば、「尊敬の対象をもたなくなつた」不幸な存在なのではなかろうか。

## 2. ファン行動の実際



かつて、「巨人、大鵬、たまごやき」と、子どもの好みがくくられた時代があった。しかし、当時に比べれば現在のほうが、その対象がより多様化し、細分化しているであろうことは想像にかたくない。それでは、具体的

に子どもたちは、だれをヒーローもしくはアイドルとし、そのファンとしてどのように行動しているのだろうか。本章では、彼らのファン行動の実際を、つぶさに追ってみることにしたい。

### スーパー・ヒーローはだれか

まず、表1、表2、表3に、「あなたの心に浮かんでくる有名人」をジャンル別に記入させた結果を掲げた。それぞれのジャンルごとに3名以内をあげさせた中から、無作為に1,000サンプルを抽出して集計してある。

かりに1,000サンプルの3割、つまり300票をある意味でヒーローの資格ラインとすれば、タレントの「チェックアーズ」、画家の「ピカソ」、政治家の「中曾根総理大臣」、音楽家の「ベートーベンとモーツアルト」、発明家の「エジソン」、歴史上の人物として「徳

川家康」が、それに該当することになる。しかし、3割ラインで、はたしてこれを「ヒーロー」の条件としてよいだろうか。表に示すように、票はこまかく細分化されており、たしかに多くのジャンルで1位と2位の間に比較的大きな差がみられるものの、これらを、各ジャンルにおけるヒーローと名づけるのにはためらいが生ずる。まして、ビッグなヒーロー、スーパー・ヒーローの影などどこにもない、と言ってよいのではなかろうか。

ちなみに、スター・タレントの項目では、

表1・ジャンル別有名人～その1～

(人)

	スターやタレント		スポーツ選手		画家や彫刻家	
1	チェッカーズ	316	カール・ルイス	266	ピカソ	359
2	中森明菜	260	瀬古利彦	190	ゴッホ	79
3	近藤真彦	167	原辰徳	156	ミレー	53
4	松田聖子	144	中畠清	135	レオナルド・ダ・ヴィンチ	23
5	シブガキ隊	81	王貞治	128	いわさきちひろ	18
6	小泉今日子	70	篠塚利夫	70	ルノワール	14
7	タモリ	66	山下泰裕	68	山下清	12
8	ピートたけし	61	具志堅幸司	53	岡本太郎	11
9	田原俊彦	55	長島茂雄	44	葛飾北斎	11
10	萩本欽一	44	江川卓	42	セザンヌ	10

(1,000サンプル×3件法)

表2・ジャンル別有名人～その2～

(人)

	小説家や詩人		政治家		音楽家	
1	夏目漱石	159	中曾根康弘	309	ベートーベン	643
2	江戸川乱歩	70	田中角栄	155	モーツアルト	384
3	宮沢賢治	58	レーガン	78	バッハ	175
4	赤川次郎	48	鈴木善幸	41	滝廉太郎	48
5	北原白秋	37	リンカーン	30	チャイコフスキイ	41
6	石川啄木	25	安倍晋太郎	17	ショパン	28
7	小林一茶	24	伊藤博文	17	スッペ	15
8	芥川龍之介	24	林三蔵	17	リスト	13
9	アンデルセン	19	ワシントン	12	山田耕筰	9
10	松尾芭蕉	18	福田赳氏	11	サン・サーンス	7

(1,000サンプル×3件法)

表3・ジャンル別有名人～その3～

(人)

	科学者や医者		発明家		歴史上の人物	
1	野口英世	258	エジソン	522	徳川家康	386
2	キュリー夫人	127	ライト兄弟	143	豊臣秀吉	176
3	ナイチンゲール	48	ノーベル	56	織田信長	175
4	ニュートン	25	ペル	40	聖德太子	174
5	ガリレオ	21	ニュートン	36	宮本武蔵	38
6	シュバイツァー	20	キュリー夫人	29	福沢諭吉	38
7	北里柴三郎	15	ワット	19	卑弥呼	25
8	湯川秀樹	13	ガリレオ	11	源頼朝	23
9	杉田玄白	13	平賀源内	8	伊能忠敬	22
10	アインシュタイン	11	野口英世	8	源義経	21

(1,000サンプル×3件法)

ほとんどが、毎日のブラウン管に登場する人物ばかり。スポーツ選手も、カール・ルイス、瀬古利彦、山下泰裕といった過日のオリンピックのヒーロー以外は、巨人の選手がほとんどであり、その中でも、かつてのビッグスター王は5位、おとなたちが孰ようラブコールを送っている長島ですら、9位に下落してしまっている。

また、画家や彫刻家、小説家や詩人、音楽家、科学者や医者、発明家などのジャンルでの有名人には、ほとんどが故人の名があげられており、これらの領域での現代に生きるビッグスターは、子どもの中にそのかけらもないと言ってよさそうだ。

なお、タレントやスポーツ選手について、(歴史上の人物を除いた)8ジャンルの中で「現在の人びと」が多いのは「政治家」である。「中曾根康弘」を筆頭に、「田中角栄(2位)、レーガン(3位)、鈴木善幸(4位)、福田赳氏(10位)」となり、すべて首相(大統領)経験者である。多少なりとも、現に動いている政治の姿が、子どもたちの目に見えているとでも言ってよいだろうか。

以上の結果をみてみると、どうやら現代の子どもたちの中には、アイドルや有名人はあっても、ヒーロー、とくにスーパーヒーローといった存在は影をひそめてしまったと言えるのかもしれない。

## 好きなタレントとファン行動

しかし、まだそれでもヒーローがないと言いつつ切ってしまうには、気がかりな点が残る。子どもたちがあげた「有名人」の中で、比較的上位にある「スター・タレント」たちが、その意味内容は変わっても、現代的なヒーローたり得ているのではないか、という点を確かめてみなくてはならないだろう。こうしたスター・タレントたちは、子どもたちにどう受け入れられているのであろうか。ここでは具体的な行動レベルを中心に、ファン行動の実際をとらえてみたい。

まず、華やかにブラウン管に登場する歌手やコメディアン、いわゆるテレビタレントについてである。

調査票では、まず好きなタレント1人を特定させ、そのタレントに対するファン行動の実際をとらえようとした。表4は、好きなタレントとして子どもたちがあげた中から、上位20名を掲げたものである。先に紹介した表1の「有名だと思う」タレントと比較して、上位10人は不動のメンバーであり、ここでもチェックカーズの圧倒的人気は変わらない。

また、かつてはスターとしての地位を獲得

しにくかったであろう「ビートたけし」や「タモリ」のように、特異なキャラクターの存在も注目される。11位以下にも「明石家さんま」「志村けん」「片岡鶴太郎」といった、同系列に属するタレントが人気スターの座を占める。いっぽうでは新たな文化の担い手と評価される彼らの出現は、子どもたちの中のスター観の変化を示すものであろう。

その点を確かめるために、図5を用意した。ここでは、特定の「好きなスター」について、用意した8つの特性のそれぞれにどのくらいあてはまるかをたずねたものだ。

説明の都合上、まず女子の結果からみていくと、①「やさしそう」52%、②「カッコいい」47%、③「歌がうまい」46%の数値が目をひく。この中で、後者の2つ、つまりルックスと歌唱力は、いわば伝統的なスターの要素であった。これに対して、「やさしさ」という人格の一部の特性への評価が筆頭にあげられ、注目されはじめたことは特筆に値しよう。女の子にとってスターは、文字どおり遠くて光り輝く存在から、ぐっと身近な、いわば家族や友だちに似た存在へと移行している

のかかもしれない。

他方、男子では、女子が上位にあげた3つの要素はぐっと低率に抑えられ、かわって、①「おもしろい」39%という、先にのべたスピーディなギャグを売りものとする「お笑いタレント」的要素に人気が集中する。スピー

ドと意外性に富む彼らの言動は、「芸」のワクを越え、いわゆるキャラクターそのものの表現であるとの見方ができよう。そうした意味では、「やさしさ」と「おもしろさ」というタレントのキャラクターすなわち人間性が、ルックスと歌唱力という伝統的なスターの要

表4・好きなタレントベスト20

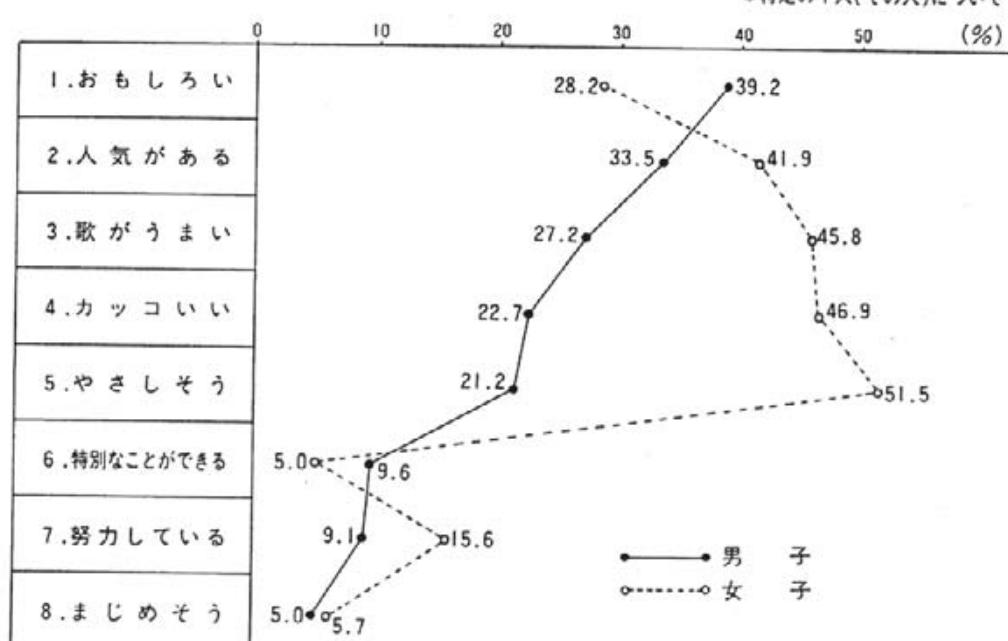
(人)

1	チエッカーズ	173	11	明石家 さんま	16
2	中森 明菜	154	12	堀 ちえみ	14
3	近藤 真彦	62	13	石川 秀美	13
4	ピート たけし	62	14	早見 優	11
5	シブガキ隊	25	15	薬師丸 ひろ子	10
6	松田 聖子	24	15	志村 けん	10
7	タモリ	24	17	マイケル・ジャクソン	8
8	小泉 今日子	21	18	細川 たかし	7
9	萩本 欽一	19	19	柏原 芳恵	5
10	田原俊彦	17	19	片岡 鶴太郎	5

(抽出1,000サンプル)

図5・好きな理由(歌手やタレント)\*

\*特定の人(その人)について



素を徐々に侵食しつつあると言えるのかもしれない。

このようにさま変わりしたスター像に対して、それでは子どもたちは、どのようなファンぶりをみせているのであろうか。

まず図6では、それらのスターを、いつ好きになったのかたずねてみた。「1年か、それより最近」が全体の75%にもなる。つまり彼らが「好きなスター」といっても、昔からずっと忠実にそのファンだったわけではなくて、ごく最近の「新しい」ファンであることがわかる。

それではそうした対象について、彼らがいつまでファンでいられそうか。いわばその熱狂ぶり、ファンぶりをみようとしたのが、図6の下部である。「(この先いつまで好きでいられそうですか)好きでなくなることがありますですか」とたずねた結果、「一生ずっと好き」とこたえたのは、わずか12%。本来ならば、この層だけが、「ファン層」の名に値するものではなかろうか。しかし、基準を少しゆるやかにして「わりとあとまで好きだろう」を加えても、その割合は半分に達しない。「もしかしたら好きでなくなる」31%、「かならず(いつかは)好きでなくなる」21%という数字は、現代っ子のシラケぶりを象徴しているようで、こわくさえなる。

つぎに図7には、具体的な行動レベルでの子どもたちのファンぶりを掲げてある。ここでは、「ポスターや写真を集め」「スターのサイン入りの品物を大切にし」「コンサートやショーにかけつける」という熱狂的なファ

ンとしての姿はなく、せいぜい「テレビをわりと(できるだけ)見る」程度という状況が読みとれる。小学生という行動面での制約の多い立場と、スイッチを入れるだけで好みのスターと対面できるという手軽さが、こうした傾向の背景となっていることは容易に想像がつく。

しかしこのことは、とりもなおさず、現代には小学生を熱狂させるスターがない、いわばヒーローのいない時代を示しているとも言えそうである。

さて、つぎの、ファン意識を探ってみようとした図8では、こうした傾向を裏打ちするかのように、「たとえいちばん好きなスターであっても尊敬するわけではない」とする子どもが、男子でほぼ半数、女子でも3分の1にのぼっている。さらに、「好きではあっても、その人のようになりたいとは思わない」と、たとえ自分にとってのスターではあっても同一化の対象ではないと一線を画す子どもが、やはり男子で6割、女子でも4割と、高い数値を示すようすも見いだされる。たとえ多くの人に支持されるスターではあっても、そのスターと積極的に自らをかかわらせようとしない子どもたちの姿が浮かび上がってくる。そうした意味で、最後の「10年たてばそのスターはすっかり忘れられている」か「少しほぼえている人もあるだろう」という数字(合わせて7割前後)からもわかるように、現代の子どもたちの中にヒーローはいない、という結論が、またもやここでも裏づけられる。

図6・好きになった時期・好きでなくなること(歌手やタレント)

〈その人を〉	(%)				
	入学前 から	2年前から	1年前から	2~3ヶ月前から	つい最近
好きになった時期	5.3	19.4	29.6	26.8	18.9
一生 ずっと好き					
わりと あとまで好き					
もしかすると 好きでなくなる					
好きでなくなる					
好きでなくなることは	11.5		36.7	31.1	20.7

図7・ファン行動(歌手やタレント)

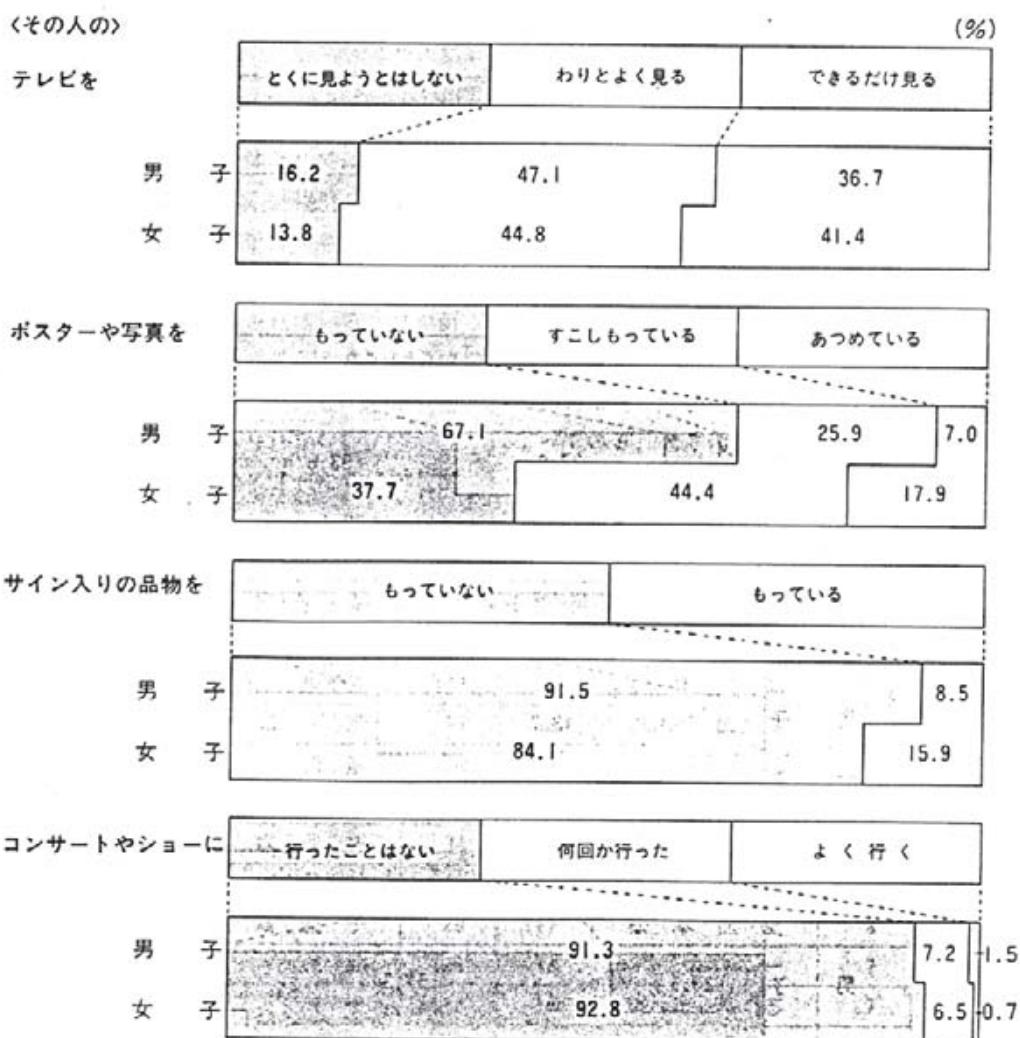
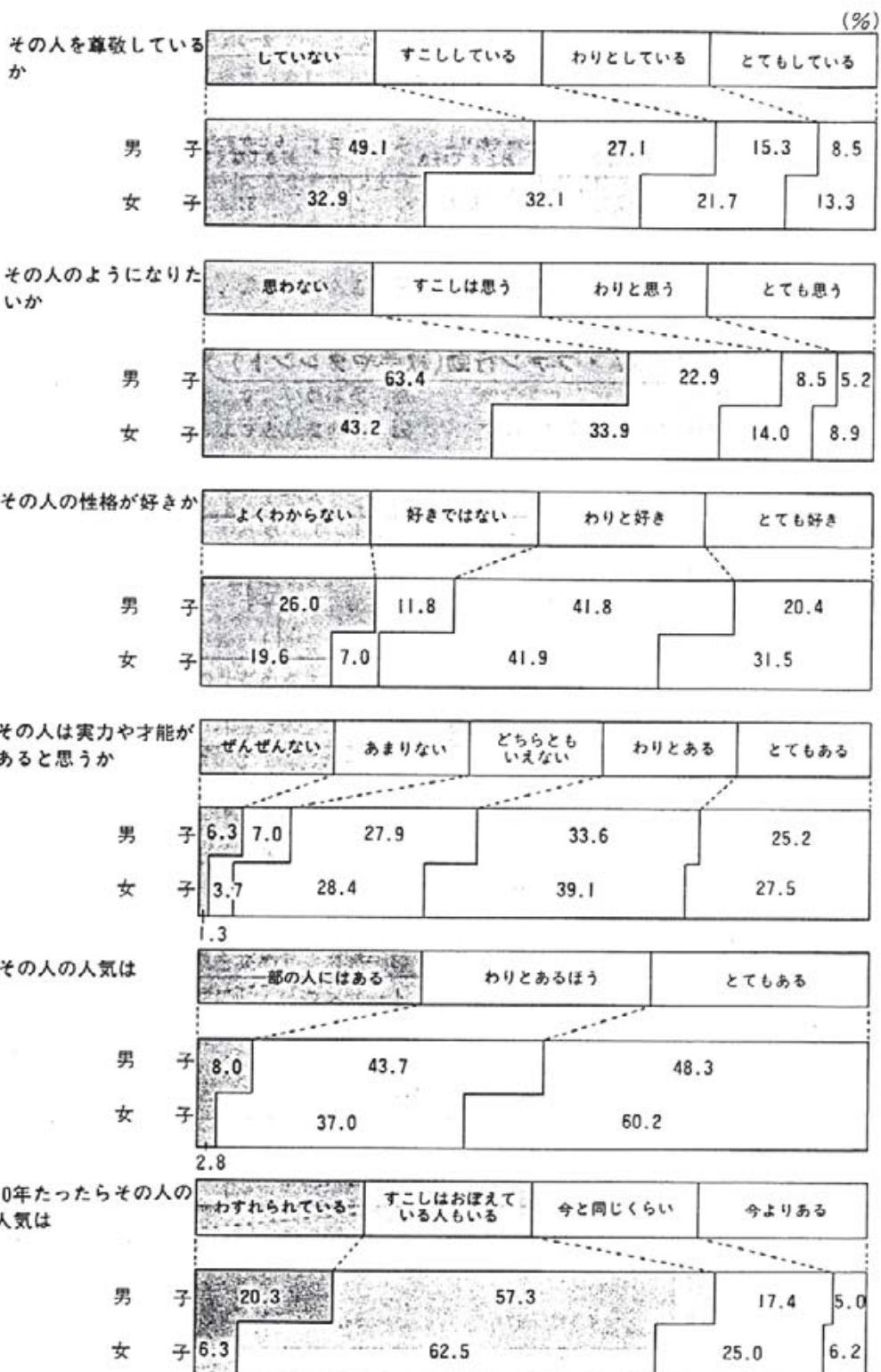


図8・ファン意識(歌手やタレント)



## 好きなスポーツ選手とファン行動

おびただしい数と種類のタレント群が輩出されている今日の文化的状況が、かならずしも小学生にふさわしくないとするなら、では、さわやかさが売りものの「スポーツ選手」と子どもとの関係はどうであろうか。

まず、表5には、好きなスポーツ選手の上位20人を掲げてある。すでにみてきた表1とほとんど同じく、ロサンゼルスオリンピックを契機として、世界的なスーパーヒーローの座を獲得したカール・ルイスの圧倒的な人気が、まずダントツである。ついで、中畠清、瀬古利彦、原辰徳などの第2グループ、さらに王貞治までの第3グループと、人気の層が形成されている。全体としては、これまで、いわばわが国における国民的スポーツとされてきたプロ野球からほぼ半数の9名、それにマラソン、柔道、水泳など各人気競技の代表スターによって構成されている。プロ野球以外の選手たちには、昨年夏オリンピックが開かれたという時間的な事情を、多少考慮しておく必要があるかもしれない。

こうしたスポーツ界のスターたちに対して

は、図9に示したように、さすがにタレントやスターたちとちがって、「実力」が評価されている（男子63%、女子50%）のはおもしろい。また、女子では2番目に「努力している」がきており、男子でも、この特性は3番目。この点は、子どもの人間形成に対して評価できそうだ。しかし、「まじめそう」という特性は最下位にちかく、男子で15%、女子で17%しか、そう評価していない。「努力しているが、まじめではない」とする現代っ子の評価のスタイルがおもしろい。

それでは、タレントに対しては「テレビでなるべく見るぐらい」と、それほどの熱狂ぶりをみせていなかった子どもたちは、スポーツ選手に対しては、どのようなファン行動をみせているのであろうか。図11では、性差が比較的顕著にあらわれており、テレビを通して、あこがれのスター選手との接触を「できるだけしよう」としている子どもは、女子の25%に対して、男子はほぼその倍の46%となっている。とくに男子は、他のすべての項目で女子より積極的であり、またタレントのと

表5・好きなスポーツ選手ベスト20

(人)

1	カール・ルイス	147	11	山本浩二	17
2	中畠清	75	12	具志堅幸司	15
3	瀬古利彦	74	13	江川卓	13
4	原辰徳	65	13	江上由美	13
5	篠塚利夫	34	13	掛布雅之	13
6	山下泰裕	28	16	ペレ	10
6	長崎宏子	28	17	松本匡史	8
8	王貞治	26	18	マッケンロー	7
9	山崎浩子	18	18	田尾安志	7
9	釜本邦茂	18	20	アントニオ猪木	6

(抽出1,000サンプル)

きに比べても、実行度が高い。

しかしそれら男子においても、ファン行動としては、全体として著しく低率でアピアであり、ここでもタレントに対すると同様、「熱狂」といった態度はみられないである。

しかし、図12では、図8に示したタレント

に対する態度とややことなって、「尊敬し」「その人になりたい」と思う割合が、ある程度の高い数値を示している。とくに、男子の場合にその傾向が顕著で、「多少なりとも尊敬している」子どもは86%、「多少ともそうなりたい」とあこがれを抱く子どもは

図9・好きな理由(スポーツ選手)\*

\*その人について

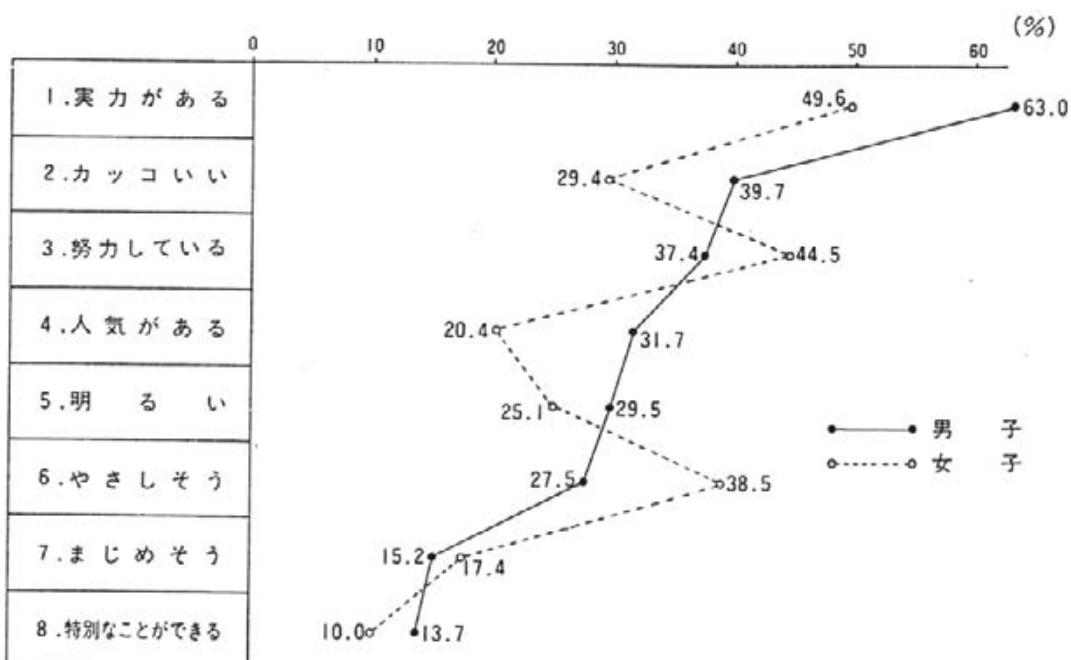


図10・好きになった時期・好きでなくなること(スポーツ選手)

〈その人を〉	入学前から	2年前から	1年前から	2~3ヶ月前から	つい最近
好きになった時期	7.4	17.9	26.4	28.4	19.9
好きでなくなることは	一生ずっと好き	わりとあとまで好き	もしかすると好きでなくなる	からずり好きでなくなる	

72%にのぼる。こうした数値の背後に、われわれは、子どもとヒーローとの関係の原型を認めることができそうである。

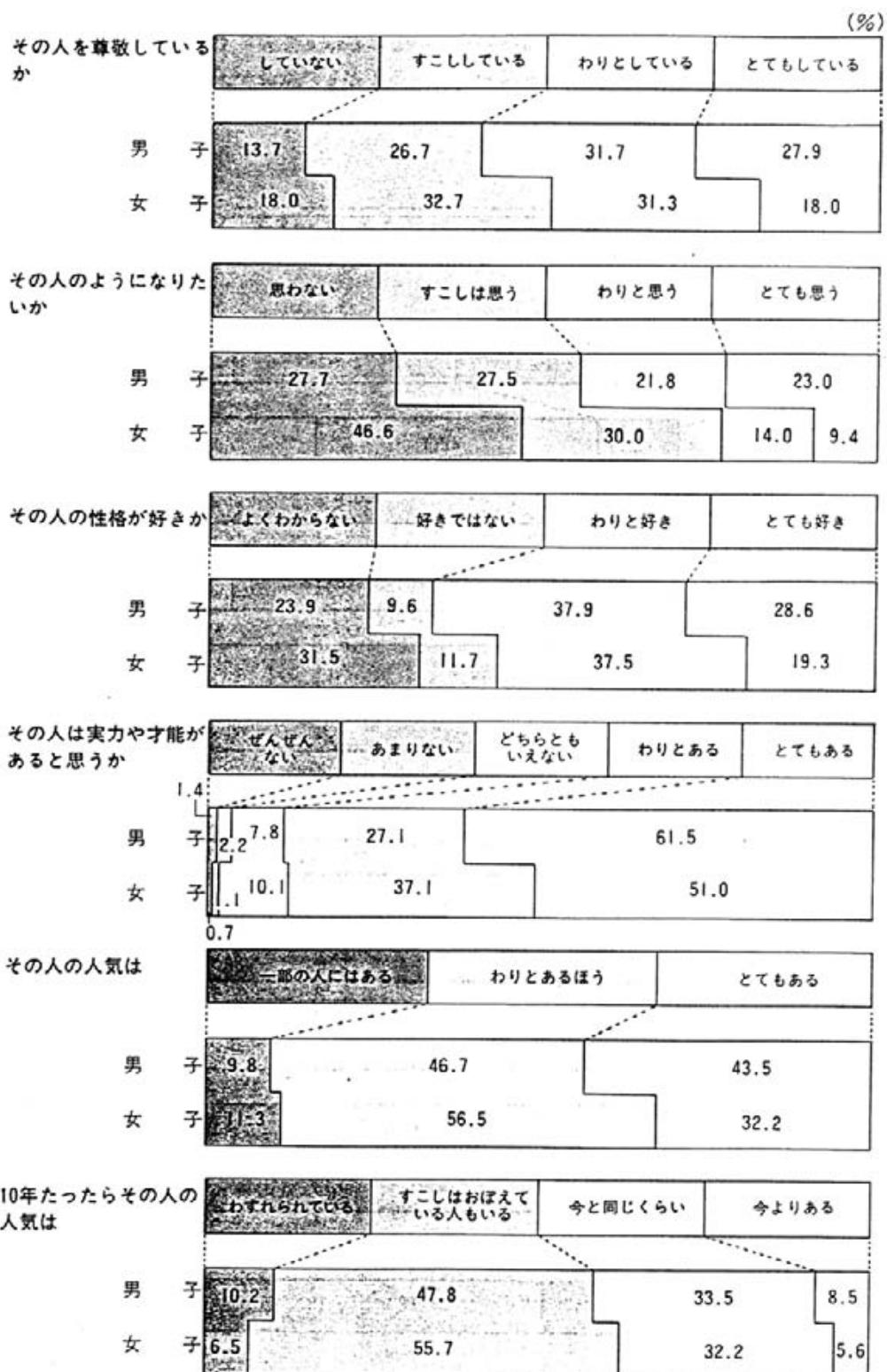
しかし、こうした動機を比較的多くもっている男子の場合ですら、「とても尊敬している」子どもはわずか28%。「とてもなりたい」

23%という低い数字には、やはり考え方されるものが含まれている。とくに、「10年たったら」の問いに、「忘れられているか、少しはおぼえていてくれる人がいる程度」とする子どもの割合が、男子ですら6割ちかいくる事実にはおどろかされる。

図11・ファン行動(スポーツ選手)



図12・ファン意識(スポーツ選手)



### 3. ヒーローの意味



これまで、尊敬する人の存在、ブラウン管を通じて子どもたちが接するスターの存在を追ってきた。子どもたちは、そうした対象をもっているとはいうものの、かならずしも自らを積極的にコミットさせようとはしていなかった。この傾向は、けっして「ヒーロー」

というテーマのもつ特性ではなく、友だちや両親、担任など、より広範囲にわたる現在の子どもたちの対人関係上の問題点でもあろう。

本レポートをまとめるにあたって、こうした傾向の背景となる子どもたちのスター観の分析をしておくことにしよう。

#### スターになった理由

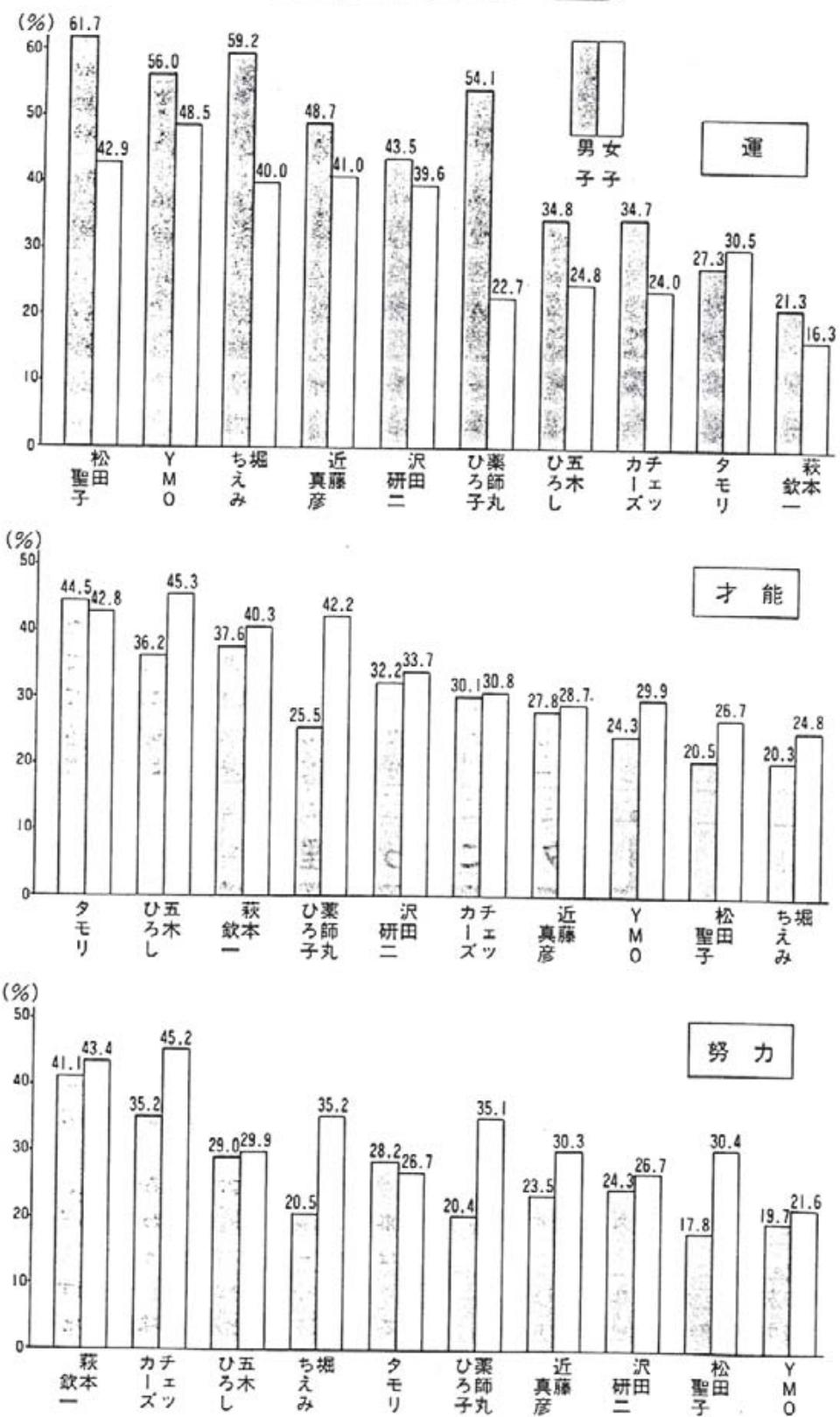
子どもたちは、いま、ブラウン管の中で華やかなスターたちが、今日の地位を獲得できたのはなぜだと考えているのだろうか。ブラウン管の前に座るだけの立場の子どもたちには知り得ない複雑な事情が、スターやタレントの背景にあることは十分承知した上で、あえて彼らの成功の原因を「運」「才能」「努力」の3つに限定し、用意した10人のスターのそれぞれを値踏みさせてみた。その結果が、図13である。

グラフの左端が、それぞれの理由をいちばんよく代表するスターだということになる。すなわち、「運がよかった」スターの代表は「松田聖子」であり、「タモリ」は「才能が

あった」からであり、「萩本欽一」は「努力によって」今の地位を築いたと考えている。3つのグラフによって、それぞれのスターのプロフィールを描いてみると、なるほどと思われる部分が多く、子どもたちがこうした側面で、意外にちゃんととした判断力を備えていることがわかる。

そして、ここではむしろ性差に、興味ある事実が発見できる。すなわち、男子においては、スターの成功の要因として「運」が重視され、女子はより「努力」を評価するのである。それぞれがどんな意味をもつかについての考察は後にゆずるとして、つきのデータに目を移してみよう。

図13・スターになった理由



## スターとの距離

前章では、「やさしさ」や「おもしろさ」といった性格的特性の重視の中で、比較的身近な存在としてのスターの評価がなされている。ここでは、前章の読みとりに呼応して、子どもたちが、自分とスターとのへだたりをどのくらいを感じているかを探ってみることにしよう。

まず、図14では、「そのスターのようにあなたもなってみたいですか」と、直接的に同一化の対象としての意味をたずねた結果を掲げた。グラフから明らかなように、たとえば「チェックカーズ」については、女子の45%、男子の33%が、「多少なりともなってみたい」とこたえている。あこがれの度合いは、女子に圧倒的に高く、男性タレントの何人かについても、男子より同一化の願望が強い。

それではこうした自分たちの願望がどのく

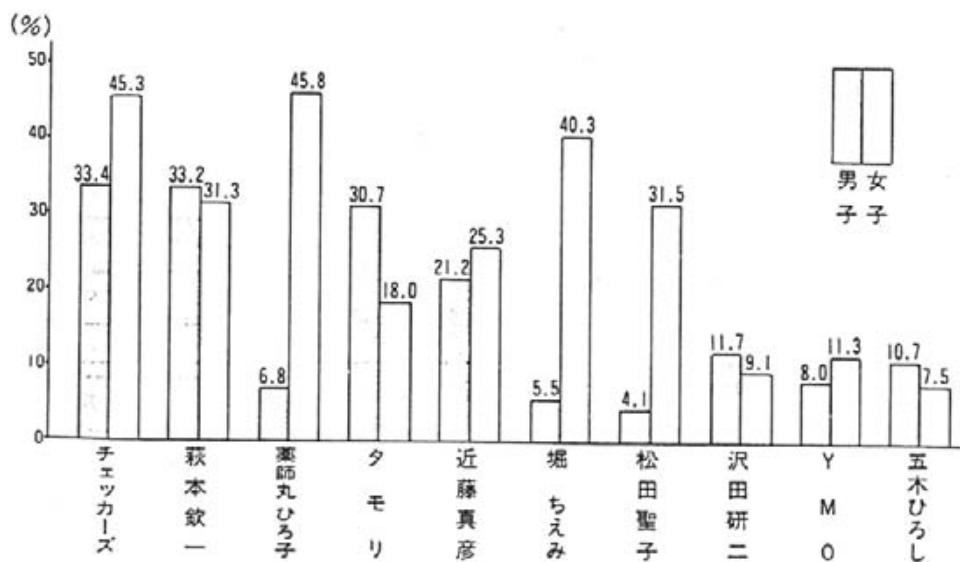
らい実現可能性をもっていると、子どもたちは考えているのだろうか。

図15図16にそれを示した。まず可能性(▲▼印)は全体として非常に低く評価されている。対象を同性に限り、「もしかしたら・たぶん・絶対」なれると考えられている割合は、男子で20.9%、女子で36.8%でしかない。しかし、「すこし・わりと・いつも」なりたい子どもも少なく、男子で21.3%、女子で39.8%でしかない。中では、女子のほうかなりたい子どもの割合が高く、しかもなれるだろうと思っている割合が高い。しかし計算の基礎にするスターの性比がバランスを欠いているので、ここでは、なれる可能性となりたい希望の割合の差をとってグラフ上に表してある。

すなわち、▲は、「なりたい子どもより、なれそうだと考える子どもが多く」、▼は逆

図14・その人のようになりたいか

\*数字は「すこし・わりと・いつも」なりたいと思っている割合



に、「なれそうだと考える子どもより、なりたい子どもが多い」ことを示している。

さて、図17図18は、「では自分はなれなくて

も、クラスの友だちの中になら、ひょっとしてなれそうな人がいますか」とたずねてみた結果である。クラスレベルで「絶対なれな

図15・スターへの可能性(男子)

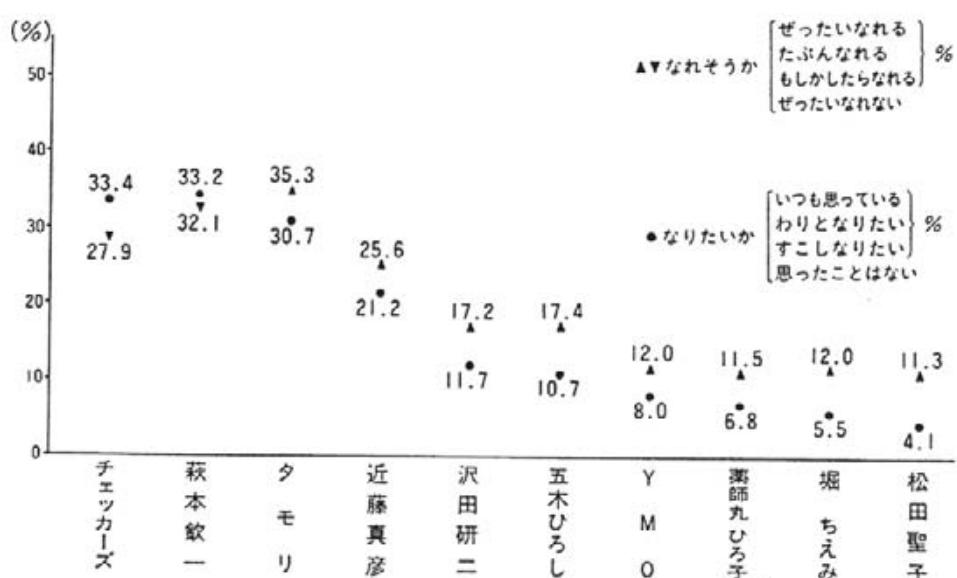
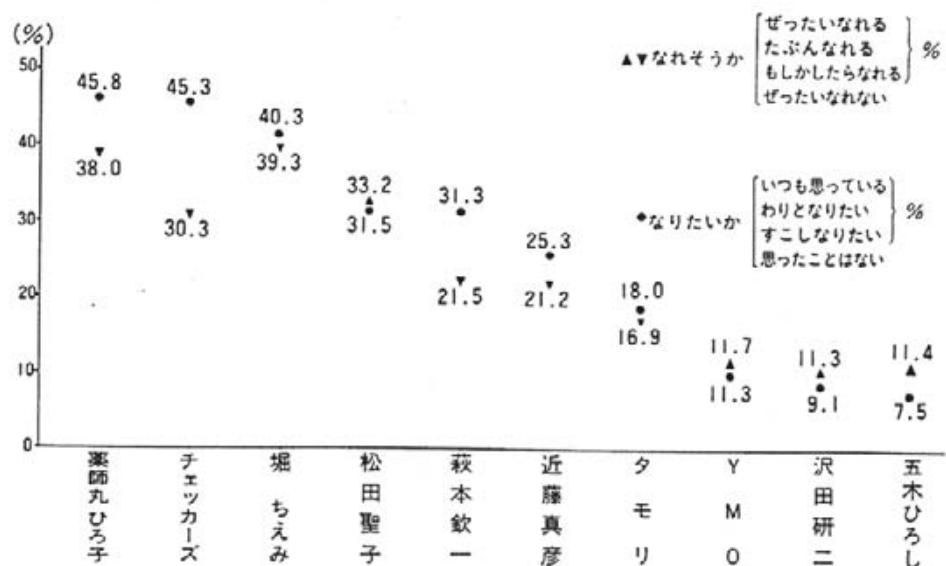


図16・スターへの可能性(女子)



い」が半分を越すタレントは、男子で9人、女子では6人となる。全体として「親しみやすさ」がタレントの特性になってきていると

はいえ、やはり子どもたちの、タレントとの心理的距離はまだ十分遠いとも言えそうである。

図17・クラスの友だちならなれそうか(男子)

	ぜったい なれっこない	もしかしたら なれるかもしれない	たぶん なれるだろう	ぜったい なれるだろう	(%)
1.タモリ	48.5	29.8	14.2	7.5	
2.萩本欽一	56.3	26.5	11.9	5.3	
3.チェックカーズ	56.9	25.4	10.2	7.5	
4.近藤真彦	57.8	28.4	8.6	5.2	
5.松田聖子	64.7	23.2	8.4	3.7	
6.堀ちえみ	67.8	22.9	6.0	3.3	
7.沢田研二	68.4	21.7	6.3	3.6	
8.薬師丸ひろ子	69.3	22.2	5.5	3.0	
9.五木ひろし	70.0	21.1	6.0	2.9	
10.Y M O	75.5	16.1	5.1	3.3	

図18・クラスの友だちならなれそうか(女子)

	ぜったい なれっこない	もしかしたら なれるかもしれない	たぶん なれるだろう	ぜったい なれるだろう	(%)
1.松田聖子	40.7	40.2	14.0	5.1	
2.堀ちえみ	42.2	38.7	13.3	5.8	
3.薬師丸ひろ子	46.2	34.3	15.3	4.2	
4.チェックカーズ	46.7	32.8	14.5	6.0	
5.タモリ	53.4	30.5	11.2	4.9	
6.近藤真彦	54.8	31.5	10.7	3.0	
7.萩本欽一	56.3	29.8	9.9	4.0	
8.沢田研二	70.6	22.2	5.3	1.9	
9.五木ひろし	71.6	21.7	4.8	1.9	
10.Y M O	74.3	17.8	6.1	1.8	

## 「あこがれる」層の分析

さいごに、スターにあこがれを抱く子どもたちの特性を探るために、いくつかのクロス集計の結果を紹介して、まとめとしたい。

まず、テレビの視聴時間との関係をまとめた表6をみてみよう。テレビを長く見る子どもほど、つまり、ブラウン管を通してではあるがスターとの接触時間の長い子どもほど、スターへのあこがれも強いであろうと予想したのであるが、表中の最大値の分散のようすからもわかるように、意外にも、ほとんど関連は見いだせなかった。すなわち、テレビを長時間見ていると、タレントへの同一化が生じて、スターにあこがれる、というわけではなさそうだ。しかし長時間視聴児のなりたい対象として、やや「萩本欽一、近藤真彦、沢田研二」が浮かび上がってくる点は、おもしろい。

また表7で成績との関連をみても、ほとんど一定の傾向は認められない。わずかに、成績の下位の子どもだけが、どうしたわけか、あこがれる態度の乏しさをみせている程度である。成績の悪い子どもは、あたかも、こうした華やかな世界に対してすら無意欲であるかのように思われる。

しかし、おもしろいことに、表8の「父親への尊敬度」と「スターになりたさ」には、はっきりした関連が出てきている。すなわち、父親を尊敬する子どもほど、「スターにあこがれている（なりたいと思っている）」傾向が強く見いだされる。身近にいる人が「すばらしい」と尊敬できる対象であれば、子どもは「もっとすばらしい人に」というアスピレーションを抱くようになるのであろうか。とすれば、父親や母親の存在は、まさに子どもの、人生に対する積極的な生き方をひきおこす重要な存在、ということになるかもしれない。

また、図19に示したように、父親への尊敬

を強くもつ子どもほど、スターが成功するの「運」ではなく、「努力」なのだと考える傾向がある。

たとえば、

		〈松田聖子〉	
		運による	努力による
父 を	尊敬している	49.3%	26.5%
	わりと尊敬している	53.0%	21.9%
	あまり尊敬していない	60.2%	19.8%

		〈萩本欽一〉	
		運による	努力による
父 を	尊敬している	26.8%	43.9%
	わりと尊敬している	30.9%	35.7%
	あまり尊敬していない	33.9%	36.5%

		〈チェックカーズ〉	
		運による	努力による
父 を	尊敬している	16.1%	43.3%
	わりと尊敬している	20.9%	41.3%
	あまり尊敬していない	22.7%	41.3%

		〈タモリ〉	
		運による	努力による
父 を	尊敬している	26.7%	30.0%
	わりと尊敬している	28.5%	23.7%
	あまり尊敬していない	34.1%	26.6%

(以上、数字はスターになった理由)

むろん、これらの傾向には多少とも父親への尊敬度の性差が反映している（女子のほうが、やや父親を尊敬する子どもが多い）点もありそうだが、母親や担任への尊敬度もまったく同様の傾向をみせており、この点については、さらに検討が必要と思われる。

表6・テレビ視聴時間×なりたさ

\*数字は「すこし・わりと・いつも」なりたいと思っている割合  
(%)

テレビ視聴時間 なりたいスター	1時間以下	2時間	それ以上
1. チェッカーズ	37.1	40.9	39.5
2. 萩本 欽一	27.4	32.9	33.5
3. 薬師丸 ひろ子	26.7	28.3	23.5
4. タモリ	24.7	26.3	24.5
5. 近藤 真彦	21.1	22.5	25.4
6. 堀 ちえみ	24.6	23.7	20.3
7. 松田 聖子	16.9	18.0	16.9
8. 沢田 研二	9.8	8.9	12.1
9. YM-MO	9.7	10.2	9.4
10. 五木ひろし	10.3	9.3	8.7

○は最大値

~~~は最小値

表7・成績の自己評価×なりたさ

\*数字は「すこし・わりと・いつも」なりたいと思っている割合  
(%)

| 自分の成績<br>なりたいスター | ぜんぜん<br>できないほう | あまり<br>できないほう | ふつう  | わりと<br>できるほう | とても<br>できるほう |
|------------------|----------------|---------------|------|--------------|--------------|
| 1. チェッカーズ        | 32.9           | 44.1          | 38.9 | 40.7         | 33.6         |
| 2. 萩本 欽一         | 25.7           | 31.4          | 31.6 | 40.2         | 36.0         |
| 3. 薬師丸 ひろ子       | 14.9           | 25.3          | 28.3 | 26.6         | 18.0         |
| 4. タモリ           | 18.8           | 24.2          | 23.9 | 29.5         | 32.4         |
| 5. 近藤 真彦         | 18.2           | 27.7          | 21.8 | 25.4         | 23.4         |
| 6. 堀 ちえみ         | 16.0           | 22.5          | 24.3 | 24.2         | 12.7         |
| 7. 松田 聖子         | 12.7           | 18.1          | 17.9 | 19.6         | 9.9          |
| 8. 沢田 研二         | 7.5            | 11.6          | 9.2  | 14.0         | 13.5         |
| 9. YM-MO         | 8.1            | 8.9           | 9.6  | 12.5         | 7.2          |
| 10. 五木ひろし        | 3.4            | 10.2          | 9.1  | 11.2         | 9.9          |

○は最大値

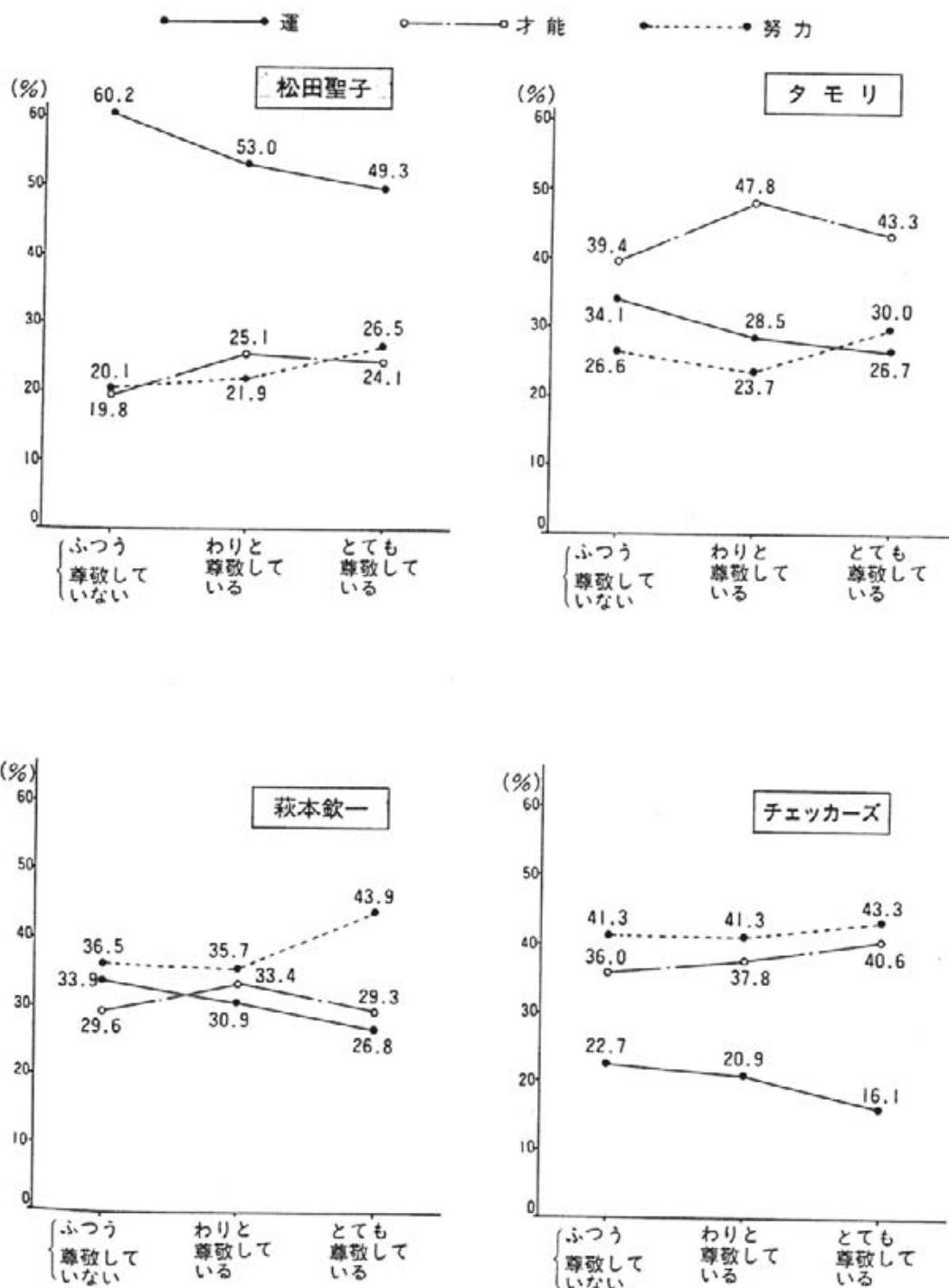
~~~は最小値

表8・父親への尊敬度×なりたさ

\*数字は「すこし・わりと・いつも」なりたいと思っている割合  
(%)

| 父親への尊敬<br>なりたいスター | ふつう<br>べつに尊敬していない | わりと尊敬している | とても尊敬している   |
|-------------------|-------------------|-----------|-------------|
| 1. 田代 テニーハーヴィー    | 35.7              | <         | 37.8 < 41.8 |
| 2. 矢野 本 飲         | 28.9              | <         | 30.7 < 35.1 |
| 3. 薬師丸ひろ子         | 21.1              | <         | 26.0 < 27.4 |
| 4. シンペーモーリー       | 22.4              | <         | 24.7 < 26.2 |
| 5. 五郎 藤 真一        | 21.1              | <         | 23.5 < 24.2 |
| 6. 多場 勝 ち込み       | 18.6              | <         | 20.8 < 24.9 |
| 7. 松井 田 聖子        | 13.6              | <         | 15.6 < 19.1 |
| 8. 尾 田 研二         | 8.0               | <         | 10.3 < 11.8 |
| 9. 木村 M-100       | 8.8               | <         | 9.3 < 10.1  |
| 10. 五木 ひろし        | 7.2               |           | 6.8 < 11.1  |

図19・父親への尊敬度×スターになった理由



## まとめに代えて

以上みてきたデータからは、どの角度からみても、現代の子どもたちの心の中に、スーパーヒーローやビッグなスターがいる気配は見いだせなかった。たびたび指摘されただが、豊かな社会といわれる現代において、豊かのは物質的側面だけであり、子どもたちの心の中には、1人のヒーローすら住んでいないのだろうか。

マスコミによって続々とつくり出されたちいさなヒーローたちが、ヒーローになるやいなや、また同じマスコミの手によって破壊されるという姿は、かのロッキード事件の例をひくまでもなく、日常的にわれわれの間に見いだされる。そのことが、子どもたちから、あこがれの対象を求める気持ちを奪い、「どうせこのスター（ヒーロー）の命運もつかの間のこと」というシラケた気持ちを抱かせる要素として働いていることは、十分に考えられる。

たしかに、考えてみると、われわれ人間界には、本来お化けのようなビッグスター、スーパーヒーローたちはいないのかもしれない。これまでの時代にあったスーパースターたちは、ナポレオンにしても聖徳太子にしても、

ただ、人びとの想像力の所産にすぎないのかかもしれない。すると、情報の伝達がきわめて十分にすみやかに行われる現代では、われわれの世界にヒーローの生まれる余地はほとんどないのかもしれない。そのことは、おとなにおいてはむろん、子どもにとどめ限りなく不幸な時代が、現代なのだと言えそうである。

そう考えてくると、たとえばミスター・ジャイアンツも、背番号3のあの華やかな活躍ぶりをすべての人びとのまぶたの奥に焼きつけたままにして、監督のユニフォームは着るべきでなかっただし、その後もうろうろしたようすで人びとの前に姿をあらわすべきではなかったという気がする。ご当人には酷な言い方かもしれないが、しかし、子どもたちがあこがれの対象を失って、ぼっかり聞いてしまった黒い穴は、だれかが、無理をしても埋めてやらなければならない。スーパー・ヒーローの座についたものは、その後スターの座をおりた後でも、社会に対し子どもたちに対して、ひとつの「責任」をもっていると言ってはいけないだろうか。

\*おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。